魔女と師弟関係

旗手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔女と師弟関係

【Ｎコード】
Ｎ３１３３Ｙ

【作者名】
旗手

【あらすじ】
村はずれの塔に住む変わり者の魔女。そこに弟子入りした新米魔術師の少年、ハンス。
２人を通して自然と秘儀に満ちた魔術師の生活を描く。

ここは未開の森だ。
ハンスは歩きながら思った。見渡す限り、太く背の高い針葉樹が林立している。日光は遮られ、まだ日は高いというのに、森の中は薄暗い。ときおり老婆のようなしわがれた声でなく鳥の正体も、見定めることができなかった。
「この森は、ちっとも伐採が進んでいませんねえ……」
ハンスは前方を歩く背中に向けて言った。
「あまり人が立ち入らない森ですからね」
その人物は振り向かずに応えた。声色は高く澄んでいる。もう1時間以上歩きどおしだが、その人物の歩調は疲労を感じさせなかった。腰まで伸びた漆黒の髪が、きびきびした足どりに合わせて揺れる。こんなデコボコした道をよく苦もなく歩けるなあとハンスは感心した。
太い幹や根の合間を縫うように伸びた道は、十分な舗装がされておらず、何度もそこを通ることで踏みならされた獣道のようだった。ハンスは、まさにその道を踏み固めたであろう人物に従って歩いているところだ。
その人物は肩越しにこちらを振り返る。光を宿した碧い瞳がハンスを見た。
「……疲れたのですか？」
ハンスの声の調子で気づいたのだろう。彼は荒い息遣いを抑えられないほど疲労していた。
「ええ…まあ…」
力無く応えると、前を歩いている人物はくるりと踵を返した。
ハンスは息を呑んだ。
その人物の立ち姿はまるで絵画のような美しさだった。豊満な胸とくびれた腰が地味な黒依の下からもうかがえる。漆黒の髪に縁取ら

れた顔は彫像のようにととのい、色白で無表情だ。その顔にはめ込まれた宝石のような碧眼がこちらに煌めきを向けていた。
「どうかしましたか？」
「いえ。なんでもありません」
ハンスは我に返って応える。彼女の美しさは、人ならざる魔性を感じさせる。魔女としての力の顕れなのだろうか。男のハンスはそんなことを思わずにいられなかった。
「疲れたのなら、休みましょう」
彼女はほっそりした指で道の脇を差した。
二人は道から外れ、腰ほどもあるシダの茂みを分け入ると、開けた場所に出た。
うす暗い森にぽっかりとあいた青空。ハンスは一瞬、疲れを忘れてそれを見あげた。
奇妙なやすらぎを覚えた。
この感覚は過去に経験したことがある気がしたが、いつのことか思い出せなかった。
魔女は広場の中央まで歩いていく。
どうやら泉が湧いているようだ。小さな水面が陽光を反射してきらきら輝いている。
彼女は泉の傍らにひざをつくと、手杓で水をすくい、形のいい唇まで持っていく。
水を飲み干すまでの一部始終を、ハンスは棒のように突っ立って見とれていた。
「あなたも飲んでみなさい」
「は、はい」
反射的に従ってしまう。
彼女の名はエルザという。村はずれの丘に建つ塔に住む魔女である。
丘は森と村との境にあり、エルザは二つの領域を行き来し、両地の関係を保つことを生業としている。
森へ遠出することも彼女の活動の一つで、弟子であるハンスは今そ

れに随行しているところだった。
ハンスは魔術師のギルドに所属しており、階級は一番下の徒弟である。昇級するための試練として、エルザの住む塔に派遣され、仕事を手伝っていた。
エルザはギルドの中でも「導師」と呼ばれる最上位の階級に属する。そんな彼女がなぜ、辺境の村のはずれにある小さな塔にこもって暮らしているのか、ハンスには謎だった。魔術を極めるにしても、いい暮らしをするにしても、ギルドの本部に居を構えれば、最上の環境が望めるはずなのに。
　そこでハンスは、エルザがここにいる理由を探るために、あえて彼女に従事することを昇級の試練として選んだ。ギルドでは「徒弟」に限らずすべての階級の魔術師が昇級するには、自分より上位の階級のものに従事して、その才を認められなければならない。あえて辺境に住む変わり者に従事したがるのは、ハンスのような特殊な動機がある者くらいだった。　よって、彼女の弟子はハンス一人だけだった。
　ハンスが水を飲んでいる間に、エルザは倒木の上に腰かけた。髪をかきあげ、もの憂げな表情で陽光の射し込む空を見上げる。
　ハンスは水を飲み終えると、彼女のとなりに腰かけ、一緒に空を見上げた。
「いったい、なにを見てるんですか？」
「雲の動きです」
「天気を計ってるんですか？　雲の量からして、私は今日一日、晴れると思いますが」
エルザはゆっくりと首を振った。
「もっといろいろなことがわかりますよ。風向き、湿気、空気の熱など、さまざまな要素を計れるのです」
　いいながら、森を見渡した。
「この森もそうです。木々や草花の発する匂い、葉の茂り具合、動

物たちの様子に、細かな気候の影響がはっきりと現れます。自然の全てのものが語りかけてくるのです。それらに注意を向けることは魔術の行使においても重要なのです」

「なるほど……」

ハンスも森を見わたしながら、それほどの観察力、感応力を身につけるのは自分にはむずかしいと思った。彼女の魔術、術師としての生き方を理解し、そこから何かを学びたいと思っているのだが、知れば知るほど彼女は遠い存在になってしまう。ハンスは複雑な気持ちでふたたび狭い空を見上げた。

「……あっ」

思わず声を漏らす。

「どうかしましたか？」

「ええ……」

最初にこの空を見上げたときに思い出せなかったことが、いま突然にハンスの胸をよぎった。

「あの木々の葉に縁取られた狭い空を見上げていたら、ギルドの徒弟として認められるために試練を受けていたときのことを思い出したんです」

「“書と瞑想の段階”ですね」

「ええ。独房のような個室で、ひたすら書と向き合っていました。魔術を行使するための知識を身につけることが目的ですから。でも、実際に魔術を行使できる才があるかは別問題なので、不安から、自分のやっていることの意味を自問しつづけ、虚しい気持ちになり、小さな窓から空を見上げることがよくあったんです。空を見上げると不思議と心がやわらいだものです」

ハンスは懐かしさに目を細めた。

「すぐには思い出せないほどの過去になっていたんですね……」

エルザは弟子の横顔をきらめく碧眼で一瞥し、ともに空を見上げた。しばらくの間、会話はなく、陽光がふりそそぐ広場にゆっくりと時間が流れていった。

ハンスはまわりで紡がれる時間の糸がゆっくりとほどけていく錯覚をおぼえた。
だが、突然近づく羽音で胸をかき乱され、現実に引き戻される。
バサバサバサ、影が木から木へ、ぽっかりあいた空を横切った。あの老婆のごとくしわがれた鳴き声が森に響き渡る。
ハンスは引きつった顔で辺りを見回したが、不気味な声で鳴く影の正体はわからなかった。
それが合図だったかのように、エルザがすっと立ち上がる。無表情でハンスを見下ろした。
「さて、休憩は終わりです。先を急ぎましょう」

二人はほそい獣道を黙々と歩く。ときおり、あのしわがれた鳴き声が遠くで聞こえた。エルザはあの鳴き声の主についてどう思っているのだろう。前方を歩く彼女の背中からは、いかなる心情もうかがえなかった。
しばらく歩いていると、音が聞こえてきた。
ハンスは歩きながら耳をすます。自分たちの足音、草を掻きわける音、それらに混じって、規則的な間隔で鳴っている音がある。
カーン、カーン、カーン
その音は段々と大きくなっていく。どうやらこちらから近づいているようだった。
「何の音でしょうか？」
「すぐにわかりますよ」
納得はいかなかったが、師匠である彼女の言葉に素直に従うことにした。
気づけば、いつの間にやら、あの奇妙な鳴き声は聞こえなくなっていた。
代わりに、規則的に響く音が近づいて、存在感を増していく。
かなりちかく聞こえるところまできて、エルザは立ち止まった。前方は行き止まりだった。巨大な針葉樹の群れが悠然と二人を見おろ

している。
彼女は何かを確かめるように首を巡らせる。そして、確信したように一点を見据える。印を切るようなしぐさとともに、独特の韻律がその唇から漏れだした。
魔術だ。
ハンスは師匠の一挙一動を見逃すまいと、食い入るように見つめる。エルザの一連の動作には無駄がなく、むしろ簡素で、ギルドの伝統や様式を重んじる仰々しい形の魔術とは異なるものだった。独自に編み出したものだろう。“観察と創造の段階”に到達した導師のエルザだからこそ成せることだ。徒弟になる前の者が“書と瞑想の段階”にあるように、魔術師は昇級に伴って行為やあり方そのものの段階も昇華させていく。ちなみに徒弟であるハンスは“従属と尊敬の段階”に到達していた。これは徒弟の階位においては妥当だが、呼称自体が好かないものなので、ハンスは一刻も早い昇華を願っていた。
エルザが唱え終わると、前方の景色がゆっくりと歪みはじめた。やがて、二人を見下ろしていた木々は消え失せ、開けた場所が現れた。
ハンスは音の正体を見て、納得した。
空間には、断面の新しい切株がいくつも見られた。
そんな中に、たった今、木の幹にカーン、カーンと斧を打ちこんでいる人影があった。
いかにも樵らしい武骨な外見の男だった。規則的な間隔でひびく音は、幹に斧を打ちこむ音だったのだ。
エルザは木を切る樵に向かって歩き出した。ハンスもそれに続く。
樵はエルザたちに気づいて、顔をあげた。
「お、来たか。そろそろくる頃だと思ってたよ」
そういって、笑った。不精ヒゲに覆われた豪快な笑顔だ。無骨そのもののおおきな身体に、着古した粗末なベスト、土で汚れたブーツ。典型的な樵の風貌だった。

「今日は見慣れない子どもを連れているな」
「彼はうちにきた見習いです。ギルド本部から派遣されてきました」
あまりにも短い紹介をすますと、エルザはスタスタと1人で歩き出す。彼女の向かう先には、小屋があった。ちょっとした菜園でかこまれた小屋だ。彼女は菜園に踏み入ると、膝をおる。草花の採取を始めたようだった。
樵はハンスのほうにズンズンと歩みよってきた。ハンスは固唾を飲んで、ますます大きくなる顔を見上げた。
「坊主、名前は」
「ハ、ハンスです」
答える声がうわずってしまう。ハンスは樵という人種とはじめて遭遇したので、彼らがギルドの魔術師に対してどういう印象を抱いているのかわからなかった。たいていの職業のものは、自分の生活からかけ離れた存在を嫌う。ギルドの魔術師は典型的な嫌われものだった。
だが、その樵はしゃがみこんで視線の高さを合わせると、にかっと人懐っこい笑みを浮かべた。
「俺はルトだ。よろしくなハンス」

樵
樵と少年はならんで倒木に座り、10メートルほど離れた菜園にしゃがみ込んだエルザの姿を眺めていた。
「エルザのやつ、いつになく楽しそうだな」
ルトが無精髭をさすりながら言った。
「楽しそう…？」
「おう。俺には分かる。長い付き合いだからな。あいつは鉄面皮だが、こうやって背中を眺めてると、なんとなく感情が読みとれるよ」
「へぇ……」
彼女はあいかわらず採取に没頭している。草を摘みとっては吟味し、そばに置かれたカゴに入れる。その後ろ姿は言われてみれば楽しそ

うにも見えた。
ルトとエルザの関係は持ちつ持たれつだった。家と仕事の安全を護るための魔術的な援助をルトが受けるかわりに、エルザは彼が切る木の数を制限したり、　ああして森の深部で育てられた薬草を拝借したりする。樵とのこういうやりとりは、塔の魔術師である彼女の役目の一つだった。
「ハンス。きっと、お前さんのおかげだな」
「へっ？」
「あいつはああ見えて寂しがり屋なんだ。一緒に暮らすやつがいれば、それだけで慰めになる。あのうす暗い塔に一人ぼっちで暮らすのは、さぞ辛かろうよ」
「……どうしてあんな村はずれの塔に一人で暮らしているのでしょうか」
「さあな、何か事情があるんだろう。付き合いは長いが、魔術師のことはよくわからんよ…」
ルトの沈鬱な表情を見て、これ以上は聞けまいと思った。
ハンスは、また自分の過去のことを思い出した。休憩のとき、エルザは自分の思い出に共感してくれていたのだろうか。
考えながら、空を見上げる。
人工的に切り開いただけあって
、伸びた枝もなく、大きな穴が穿たれたような空だ。
そこへ、あのしわがれた鳴き声と同時に、翼を広げた影が飛び出して来た。
まっすぐハンスたち目がけて滑空してきた。ハンスはおもわず腕で自分の顔を庇う。ルトも腕を突き出したが、なにやら様子がちがっていた。ハンスは腕の隙間から外を覗くと、息を呑んだ。
その鳥は白いシルクのような翼をはためかせ、ルトの突き出した腕にふわりと止まった。目や嘴のかたちからして猛禽の一種かと思った。だが、彼の腕に止まって、翼を畳むその身体には鉤爪のついた脚が四本あった。

その生き物は翼を除けば、子猫ほどの大きさだった。身軽にルトの腕を伝って、肩に座した。
グリフィンだ。ハンスはすぐに思い当たった。
しかし、
「小さい…？」
ルトは笑った。
「そうだ、こいつは小さい。森に適応した小型種のなかでも、もっとも小さなやつさ」
グリフィンは応じるようにしわがれ声で鳴いた。
森の中をついてきたのは、このグリフィンだったのか。
「お待たせしました」
エルザがカゴを提げてこちらへ歩いてくる。彼女はルトの肩に止まっているグリフィンに気づくと、
「リン」
呼びかけた。
グリフィンは跳び上がると、滑空して、今度はエルザの肩にとまった。
彼女は鳴き声の主を知っていたらしい。
「リンに名前を付けたのはエルザなんだ」
「へえ……」
グリフィンが甘えて体をこすりつける彼女の顔は相変わらず無表情だった。
「採取が終わりました。すこし調理室を借りますよ」
「おう」
「なにを作るんですか？」
ハンスが聞くと、エルザは事も無げに言った。
「秘薬です」
「秘薬！？」
それは、ハンスの想像したものとはだいぶ違っていた。目の前に置

かれたカップには深緑の液体がなみなみとそそがれている。
「これは……」
テーブルの向かいに座ったエルザが自分のカップを取る。一口飲んで、ふーっと息を吐いた。
「秘薬です」
「お茶ですが」
「これに勝る秘薬はないぞ。坊主」
ルトは笑う。
枝にとまっているリンがかすれた声で鳴いた。

ティータイムが終わると、2人はルトに別れを告げ、出発した。笑顔で手を振る樵をふり返りながら、ハンスはまた来たいなと思った。
エルザが採った薬草はハンスが籠に入れて背負った。
帰路をゆく彼女の背中は、何やら楽しげだった。そのあとをパタパタと羽ばたくリンが追う。
お茶の効能なのかわからないが、帰りも同じ道を通っているのに行きのときほど疲れず、休憩もとる必要がなかった。案外、秘薬というのは本当かもしれないな。ハンスが真剣に考えていると、気づけば森を抜けていた。
すっかり日が傾き、オレンジ色の光が射す風景に、帰る場所である塔が長い影を落として佇んでいた。
リンは大きく羽ばたくと2人をおいて、塔の頂上まで螺旋を描きながら飛んでいった。
「リンはこの塔のことを知っているんですか」
「親に捨てられてしまったのを成体になるまで、私があの塔で育てました。飛び方を教えたのも私です」
「飛び方？」
ハンスは訝しんでつぶやく。
エルザは振り返った。
「人も飛ぶことができるのです。秘薬を使えば」

「秘薬って…さっきのお茶ですか！？　あれにそんな効果が！？」
エルザは形のいい眉をひそめた。
「あれはただのお茶ですが」
「え……？」
魔女は弟子をおいて歩き出した。
「ち、ちょっと待ってください！　その秘薬、すごく興味があります！」
彼女は肩越しにちらりとこちらを見る。
「これからそれをつくろうと思っています。摘んできた薬草をつかって」
「ええ！？」
ハンスは指示されるまま、暖炉が設置された塔の一室に薬草を運び込んでいた。彼がこの塔にきてからはじめてはいる部屋だ。明りとりの窓がなく、四方をかこむ石壁に火影がおどっている。暖炉には材料を煮るための釜が置かれていて、湯がグラグラとにたっていた。蒸し暑さと草の匂いで、ハンスはときどき目眩を覚えた。
部屋の隅にたたずむエルザは相変わらず、彫像のような冷たい無表情を貫いている。別の場所からまわりの空間ごと切り取ってきたかのようだ。
魔女は口を開き、淡々と秘薬の材料を述べた。

人間の脂肪　１００グラム
アサの花　片手に半分
ケシの花　片手に半分
ヘレボルスの花の粉末　ひとつまみ

「まず、そこにあるナイフでケシとアサの花を細かく刻んでください。その際に意思を込めることを忘れてはなりませんよ。完成品の出来が大きく変わりますからね」
「あの……その前に扉を開けて、換気を行ってもいいでしょうか？」

「ダメです」
きっぱりと言い放った。
「この部屋には、刻むことで薬草から発散される力を閉じこめる術がかけられています。扉を開けてしまったら意味がありません。もう魔術的な試みははじまっているのですよ」
「そうでしたか……」
ハンスは額の汗をこまめに拭き取りながら花を刻んだ。汗など混じっては元も子もない。
なんとか刻み終わり、器に移した。エルザはそれを確認すると小さく頷いた。すっと歩き出し、棚へ向かう。並べられた瓶のうち一本を手に取ると、テーブルの上に置いた。
「次にこれを混ぜます」
ビンの中味は、ドロドロした白い物体だった。ハンスは背筋に怖気が走るのを感じた。
「ひょっとして、これが……」
人間の……
「獣脂です」
エルザはこともなげに言った。
「人間の脂の代わりにします。先に述べたのはギルドで規定された正式なレシピですが、毎回人間の脂を採取していたら、人里近くではやっていけませんよ」
「そうですよね……しかし、それで効果が落ちたりはしませんか」
「作り方に工夫を加えればいいのです」
「工夫ですか」
エルザはビンの蓋を開ける。酸敗した脂に特有の悪臭が部屋に立ちこめた。ハンスはまた目まいを覚えた。
部屋の熱で溶けたそれを、刻んだ花が入った器にドロリとそそいだ。なんとも不気味な混合物ができあがった。
「この段階において、人間の新鮮な皮脂を混ぜればいいのです。ために、これを素手でよく混ぜ合わせてください」

ハンスは魔術の観点からその指示に納得したが、心情的には泣きたかった。
袖をまくり、混合物に手を差し入れた。
「……！」
ドロリとした感触に寒気が走った。
傍に立つエルザは無言だが、ハンスを促しているのがなんとなくわかった。
ああ、当分手に臭いが残る。本や備忘録の羊皮紙にも臭いがうつるだろう。
……彼女はそれが嫌だったんだ。だから、僕がきてからこの薬を作ることにしたんだ。そうにちがいない。
ハンスは恨めしくそんなことを思いながら、覚悟を決めて一気に手を突っ込んだ。

「次に、混ぜ合わせたものを釜に入れます」
エルザはたんたんと告げる。
「ヘレボルスの花はどうするんですか？」
ハンスが麻布で手を拭いながら、苦々しい顔で聞いた。
「ヘレボルスは冬に咲く花ですから、摘んできた草のなかにはありません」
エルザは腰につけた袋から何かを取りだした。乾燥させた花のようだ。淡いピンクの花弁は、冬の枯れた世界に凛と咲くヘレボルスの花のそれに違いなかった。
彼女はそれを両手で包み込むと、ぐしゃりと潰した。乾燥した花は魔女の手ですり潰され、煮えたぎる湯の中にぱらぱらと落とされた。
「こうして、お湯に直接入れます。乾燥したままではうまく混ざりませんからね」
器の中身も湯の中に入れた。あとは、水分が飛ぶまで火にかけ続ける。

「煮込むことで、すべての材料が混合、濃縮されます。そうして釜のそこに残ったものが完成品です。さてーー」
エルザは部屋の扉をばっと開けた。
「その間に、残った薬草の保存処理をします」
ハンスは塔内部の石段を上り、風通しのいい上階の部屋に残りの薬草を運んだ。
部屋には横材がいく本か渡してあり、同じ種類の薬草を紐で束ねてそれにひっかける。晴れた日には窓を開け、なるべく風と陽光にさらすのだ。それはハンスがここにきた初日から任されている仕事だった。彼女はリンを連れて外に出て行ってしまった。その行方も目的も全く知らされていない。
すべての薬草を束ね終わると、横材にひっかけるためにハシゴに上る。高い位置にある窓から見える東の空は群青色に染まりはじめていた。
ハンスはすべての薬草を干し終わり、ランタンを持って部屋から出る。そろそろ秘薬ができ上がっているかと思い、釜のおかれた部屋に向かった。
扉を開けると、予想された悪臭はなく、不思議と花の甘い匂いが漂っていた。
釜をのぞき込むと、底に脂が溜まってぶつぶつと泡を吹いている。不気味な見た目と裏腹に、泡が弾けるたびに甘い匂いが噴き出した。ヘラで脂をすくい、用意したビンに入れていく。いっぱいまで入ると蓋をして、塔の外に持っていった。
すでに空は暗かった。その下で松明が三本、三角形に配置されてともっており、その中心にエルザが立っている。グリフィンがその周りを楽しげに飛び回っていた。
「持ってきましたか」
「はい」
ハンスはビンを掲げてみせた。
エルザはゆっくりと頷いた。

「それを身体に塗ります。手や首や顔に塗るだけで大丈夫ですよ」
「これは塗り薬なんですね」
「ええ、匂いは花の香りに変わっているから大丈夫です」
エルザはビンを受け取ると薬を手にすくい、顔や首にぬり始めた。
甘い匂いがハンスの鼻腔をくすぐった。彼女がその白い肌に薬を塗りつけるさまは、なんとも官能的だった。
見とれているうちに魔女は軟膏を塗り終え、微笑らしきものがその唇にあらわれた。
「これでよしー見ていなさい。我が弟子よ」
エルザは自信満々に言い放つと、松明の中心に戻り、ゆっくりと両腕を広げた。くるりと身体を回転させる。右に回り、左に回り、回りながら風に乗るように優雅に身体を移動させる。
その周りをリンが飛びまわる。回転がじょじょに早まるのとあわせて、エルザの身体はだんだんと地面から離れていくのがわかる。
ハンスが言葉もなくその光景を見つめていると、浮上する高さに併せてだんだんと回転速度は弱まり、２０フィートほどの高さの空中でピタリと静止した。
空中に止まった状態で、彼女はハンスを見下ろした。
「我が弟子よ」
「は、はいっ」
「教練です。あなたも飛ぶのです」
エルザはほっそりとした指を塔の頂上へ向けた。リンがしわがれた声をあげながら、塔の頂上まで飛んでいった。
「今夜じゅうにあそこまで到達しなさい。わかりましたね」
「今夜中にですか。しかし、どういった儀式が必要なのですか。先ほどのような見事な円舞は一朝一夕では身につかないのでは……」
「薬を塗ったのなら、如何ような様式でも空を飛ぶ結果に結びつけることは可能です」
「なぜですか？」
「空と『対話』することが、飛行魔術の本質だからです。その方法

に定まったものはありません。薬を塗るのは、空気に認識されやすくするための補助的な手段でしかないのです。練度が深まれば、薬にたよらずとも好きな時に自在に空を飛べますよ」
「『風と対話する』には、どうすれば…」
「立ち返りなさい。魔術の本質は、万象への『対話』による干渉です。自身の感応力を研ぎ澄ますことで、自分にとって最適な『対話』の方法が見つかりますよ」
ハンスは昼間、森の中でエルザの話していたことを思い出した。この魔女は普段、石像のように無口だが、弟子に何かを教えるときは饒舌になるようだ。しかし、自分にはそれ程の感応力は備わっていない。昼間の森で彼女の話を聴いて、つとに感じたことだ。
「僕にはできませんよ…ましてや今夜中にだなんて」
「できないと思っているうちはできません！」
語気を強めるエルザに、ハンスは肩をすくめた。
「でも…」
魔女は腰に手を当てて、僅かに首をかしげた。
「思い出してみなさい。昼間に見上げた空を」
「空？」
「空は、あなたが魔術師になる前からずっと変わらずに語りかけていたのですよ。だから、空を見上げる間、あなたは感慨に浸れるし、辛い過去へ翻り、それを慈しむことができたのです。あなたは空と対話していたのです。森で空を見上げていたときの感覚を思い出しなさい」
さっぱり理解できなかったが、とにかくあのときの状況を思い出し、自分の中で再現することにした。
すでに暗くなった空を見上げる。
まだ星も少なく、月が流れる雲に見え隠れしていた。
昼間、自分はどんな気分だったろうか。そうだ、とてもぼんやりした奇妙な気分だった。時間の糸がほどけていくようなーー思い出した途端、感覚が蘇ってきた。

頭がぼおっとして、視界が白っぽくぼやけていく。地面に立っている感触が薄れていき、意識がたゆたい、前後の記憶が曖昧になっていくーー。
「そうです。悪くないですよ」
凛とした声を聞き、ハンスは我に返った。
浮遊感を覚えて、思わず足下に目を落とした。地面がずいぶん遠い。
「あまり下は見ない方がいいですよ」
「さあ、ついてきなさい。我が弟子よ」
エルザは塔の頂上まで滑るように飛んでいった。塔の頂上までの高さは４０フィートある。そこまで、ハンスは空中を少し移動すれば到達できる位置にいた。３０フィートは浮きあがっているだろう。
「僕は飛んでいるんだ……」
今になって感動が押し寄せてくる。
「飛んでいるんだ。本当に……」
「喜ぶのは早いですよ。集中力を切らすと、そのまま地面へ真っ逆さまです」
頂上に降り立ったエルザが釘を刺す。
「は、はい」
表情を引き締めるハンスを見て、頷いた。
「よろしい。では、精神を統一して、自分を包み込んでいる空気をより深く感じなさい。あなたがそれを感じとれば、空気もあなたを感じとって、思い通りの場所へ運んでくれますよ」
ハンスは深く息をはいた。
「自分を包みこむ空気……」
全身の触覚に意識を注ぐ。すると、だんだん感じてくる。そっと指に触れ、頬を撫で、首すじを滑っていく空気の流れ。それらがハンスの意識に応え、ゆっくりと彼の身体を動かしはじめた。だんだん勢いづいて空中を滑りはじめる。自分の意思によるものなのか、周りに流れる風の意思によるものなのか、もはや自他の境界が曖昧だった。奇妙な一体感に満たされ、いつのまにかハンスの口元が綻ぶ。

気づいたときには塔の頂上に足がついていた。
美しくも無表情な顔が目の前にあった。
「合格です。あなたは浮遊の魔術を会得しました。これは練度が顕著に現れる術です。日々の研鑽を忘れぬように」
頬が熱くなって、思わず俯いた。
「ありがとう、ございます……」
すぐ耳元で羽音が聞こえたかと思うと、リンがハンスの肩に降りた。身体を頬にすりつけてくるので、ハンスは思わず笑ってしまった。その笑いの中には試練を乗り越えた喜びも間違いなくあった。
「さて」
エルザは踵を返すと両腕を広げた。ふわりと風が舞い、彼女の身体が浮き上がる。
「久々なのでわたしはもうひとっ飛びしてきます。あなたは私が帰ってくるまでに夕餉の支度を済ませておくように」
「ええっ」
リンもハンスの肩から飛び立った。
「ち、ちょっと…！」
魔女はグリフィンを伴って夜空へ飛びたった。
ハンスはおもわず腕を伸ばし、闇に消えるその背中を見送った。
腕をおろしてため息をつく。
「遠いなあ…彼女は僕にとってまだ遠い…」
肩を落として、夜空を見上げた。星々が砂金をちりばめたようにキラキラと輝いている。その中心に座した月は対象的におぼろげで、優しく輝いていた。そんな夜空を見上げるうちに、ハンスの胸には先までの興奮が蘇ってきた。拳を握る。
「きっと彼女の魔術を理解し、ものにしてみせる。そのためには、今以上に精進しなくては…！」
ハンスは固い思いで今夜の夜空に誓ったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3133y/

魔女と師弟関係

2011年11月7日11時23分発行